昭和54年度資料室調査報告

昭和54年度は東北地方縄文遺跡の調査を行った。主に青森・岩手両県について「旧本山コレクション」の出土資料の現地踏査であり多大の成果を上げた。

本学に所蔵する資料について毎年度出土遺跡の調査を行なって来たが，昭和54年度は東北地方縄文遺跡と大森貝塚碑について調査を行なった。主に青森・岩手両県における『旧本山コレクション』関係の出土資料の現地踏査である。

是川遺跡（青森県）

この遺跡は古来より有名で，八戸市是川にあり一王寺，掘田，中居の三遺跡の総称である。中でも中居遺跡は縄文晩期の遺跡として知られ，大正9年（1920）以降の泉山岩次郎氏の晩期土器の出現を見，著名となった。また，特殊泥炭層から出土した各種の木製品や土器，石器は有名で，約6千点が一括して現在八戸市立歴史民俗資料館へ所蔵されており，学術的にも非常に貴重な資料である。一王寺遺跡は縄文前期より中期の土器や骨角器が出土し，一部に貝塚が形成され，一王寺円筒土器として著名である。また，掘田遺跡は中居遺跡の北東に隣接し，縄文中期の竪穴住居跡が発見されている。この是川遺跡より出土した資料の中に本学所蔵で多くの泥炭層遺物がある。クルミ，ナラ，トチなどの実や，樹木，アスファルトの附着した土器片などである。これらの資料はかつて本山彦一翁がこの是川遺跡の湮滅を虞れ，この地に『是川遺跡』の碑を建立し，揮毫したことに謝し，泉山翁より送られしものという。碑の下に次の如く銅板にして喜田貞吉の撰がある。「奥羽北部ノ地、由来石器時代遺跡ニ富ミ其土器ニ現レタル工芸ノ進歩実ニ世界ニ冠タルモノアリ，就中此是川遺跡ハ中居一王寺掘田相接近シテ各系統ヲ異ニスル遺物ヲ蔵シ特ニ中居泉山氏邸内ヨリハ優秀ナル多数ノ植物性遺物ヲ発掘シテ従来知ラレザリシ。当時ノ文化ノ一面ヲ学界ニ紹介シ又掘田ノ遺跡ヨリハ古銭ヲ発見シテ是ガ絶対年代ヲ推定スルノ好資料ヲ提供セリ。八戸郷土研究会其址ノ湮滅ヲ虞レ本山翁ノ揮毫ト揖資トヲ請ヒ碑ヲ樹テテ之ヲ後世ニ伝ヘントス。昭和七年秋」とある。この地の泥炭層より出土した遺物は貴重な学術資料となるので，放射性炭素測定法などにより年代測定を行ない，是川遺跡の確かな年代を明らかにしていきたい。

本山彦一翁揮毫（昭和七年）

臥牛遺跡（岩手県北上市更木町）

更木町臥牛遺跡（岩手県）

本学の考古資料の中に岩手県更木出土とした土器，土偶，土版など20数点がある。この度の調査でこの資料は北上市更木町臥牛遺跡より出土したものであることが判明した。

この臥牛遺跡は縄文時代後，晩期の遺跡であり猿ケ石川左岸台地に立地し，加曽利B_2式，B_3式に並行する土器等と，大洞B式からA式までの土器が出土しているが，C_2式が主体をなしており，浅鉢，注口，壺形土器などが多く出土している。北上市史にも臥牛遺跡として発表されており，これによると，大正末年に猿ケ石川よりの用水路工事が行なわれた際，多数の土器，石器類が出土し一部は本山考古室へ入り現在関西大学に保管されている，とあり本山翁の蒐集であることが判明した。土器21点，土偶1点，土版1点，土笛1点の資料を蔵し，晩期の大洞C式，C_2式が大部分をしめ，ほとんど完器で，資料価値も高いので，整理完了次第紹介したい。

また，この他に東北地方の縄文資料を多く所蔵しているので，写真図版により次号から紹介していくことにする。

日本考古学史上に一頁を画した「大森貝塚」碑を調査した。

大森貝塚碑（東京都品川区大井６丁目）

明治10年（1877年）９月16日東京大学教師米人Ｅ．Ｓ．モースは助手松村任三と松浦佐用彦，佐々木忠次郎の２生徒を伴ない都下大森村の貝塚を調査し，同月29日より発掘に着手した。これが大森貝塚の発掘であり，日本考古学の出発点としている。まさに記念すべき年である。本山彦一翁はこの記念すべき貝塚が，その後荒廃しているのを見また，これが湮滅するのを恐れ，記念碑建設を大山柏，有坂鉛蔵，杉山寿栄男の各氏に委託され，本山翁の揮毫により，昭和４年11月３日除幕式が行なわれた。

碑面に次の如く氏名等を彫り込んでいる。

大　森　貝　塚　（大書右書）
昭和四年五月二十六日 起工（右書）

発起人　本　山　彦　一（以下縦書）
賛成人　理学士　岩川友太郎　　理学博士　佐々木忠次郎
理学博士　石川千代松　　法学士　宮岡恒次郎
公　爵　大山　柏　　杉山寿栄男
医学博士　小金井良精　　本山彦一　書
工学博士　有坂鉛蔵

そして碑の上部銅板に英文を彫している

The Site of the Omori Shell Mounds
discovered by
Professor Edward S. Morse,

また，この銅板の上に発掘土器を形どった壺を置いている。この碑が建てられた後，昭和５年４月，佐々木忠次郎博士により『大森貝墟』（大田区）と縦書にした碑が建立され，現在は二ヶ所ある。

以上是川遺跡，大森貝塚跡は何れも本山彦一翁の揮毫により遺跡の消滅を防ぎ得たことは日本考古学史上において忘れることのできない出来事であり永く記録にとどめておきたいものである。

また，当時大森貝塚の発掘遺物を天覧に供されたことがあるが，この時の上奏文は時の文部少輔神田孝平が文部大輔田中不二麿の代理として起草したものであり，考古趣味も専門家に近い学識を有していた翁に，モースは

本山彦一翁揮毫（昭和四年）

大森貝塚の報告書作成に関して，遺物の性質を正しくとらえるため，日本人研究者の意見も聞いたとされているが孝平翁などその最右翼の人であったと思われる。この神田孝平翁蒐集の石器類が本山翁のコレクションとなり，本学に所蔵されていることはまことに奇縁というほかない。

本山彦一翁は明治・大正・昭和の三代を毎日新聞社の社長として，今日の大毎日の基礎を築いた人物であり，神田孝平が明治期の考古学のスポンサーならば，本山翁はまさしく大正・昭和の考古学のスポンサーであり，翁自身も河内国国府遺跡の発掘，長門長府における和銅開称の鋳銭址遺跡の発掘，有田近郊古陶窯跡の発掘をしており，これらは学界に大きく寄与している。特に河内国府遺跡における石製耳飾は『玦状耳飾』と実証された発掘として長く学史に記されている著名な発見である。

神田，本山翁の考古学趣味が，わが国における考古学発展の一端をになっているといっても過言ではないと思う。　（網干，角田）

阡陵の由来

創刊の彙報に横田健一先生から「阡陵」という題をいただいた。本学の学生が愛唱する逍遙歌の一節に「名も千陵の丈夫（ますらお）が」とあり，大学の所在地「千里山」に因んだものである。阡は数字であると共に「ミチ」「墓道」という意味もある。「陵」は「ヲカ」「ツカ」「ミササギ」であり，共に考古学に関連する。

資料室の彙報にふさわしい表題である。